



「職場の戦力に早くなりた
い」と話す和久田さん

包（りんぼう）、出荷などを半年間経験し、現在は擦糸業務を担当している。糸ができるまでの工程は、まず複数本の原糸を機械で合わせ（合糸）、さらに合糸を擦（よ）り合わせて（擦糸）熱処理する。求められる製品により、糸の組み合わせや機械の扱い方はさまざまに変化する。

糸の種類が多さ、マニュアルのない機械操作に最初は戸惑ったが、「分からないことを質問すれば、丁寧に教えてもらえる」環境が用意されており、「同じようについて、実は1回1回異なる」職人技を、機械と格闘する中で身に付けていった。

職人技身に付け、飛躍へ

奮闘の日々 20代のフレッシュユバソン

東洋産業（本社岐阜県輪之内町大藪135）は擦（ねん）糸加工を中心に、不織布マスクの製造販売、不動産などの事業を展開している。繊維事業部の和久田聡海さん（21）は入社3年目で、工場では最年少。「今はまだ学ぶことばかりだが、早く仕事を覚えて、周りの人たちの力になりたい」と、日々の業務に向き合っている。

高校の生活福祉科で被服や手芸などを学ぶ中で、「糸」に興味を持った。モノづくりにも関心があり、糸を製造する東洋産業を就職先を選んだ。入社後は製品の検査や梱

東洋産業 繊維事業部

和久田 聡海さん

わくだ・さとみ

今では「糸を機械にセットする仕掛けは速くなってきたと思うし、糸が切れることもなくなっただ」と笑顔をみせる。もちろんその間には失敗も。合糸を担当していた時、「機械の設定を間違え、大量の糸を作ってしまった」。ベテラン社員の手を借りて「まき直し」を行い、事なきを得たが、以来「確認すること」を信条にしている。

「先輩社員から教えてもらったことを、これから入ってくる後輩に教えられるようになるのが今の目標」と先を見据える。

小学校から高校までバレーボールに打ち込んだ。現在も月に2、3回は地域のチームでバレーを楽しんでいる。（西濃、毎週火曜日掲載）